



---

# 健康と競技の心理

## Psychology of Health & Sport

---

◇ 特集 日本スポーツ心理学会第 47 回大会に参加して	1
◇ 特集 九州スポーツ心理学会第 33 回大会 報告	2
※特集 九州スポーツ心理学会第 33 回大会の振り返りは Covid-19 のため掲載 していません。ご容赦くださいませ。	
◇ 「こころトピック」	4
◇ 連載「みなさん！読んでみてください」	5
◇ 連載 研究タマゴ	6
◇ お知らせ	
九州スポーツ心理学会からのお知らせ	7
九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ	9
編集後記	10

---

特 集

## 日本スポーツ心理学会第 47 回大会に参加して

日本スポーツ心理学会第 47 回大会

2020 年 11 月 21 日（土）～12 月 6 日（日） Web 開催（仙台大学）

兄井 彰（ 福岡教育大学 ）

本年度の学会大会は、コロナウィルスの感染予防のため、初の Web 上の開催でした。学会企画シンポジウムや情報交換会などが中止となり、縮小した形式で運営されました。しかしながら、大会企画シンポジウムでは、「新型コロナウイルスによる未曾有の危機に遭遇するアスリートと向き合う」と題して、アスリートに対するメンタルサポートの体験事例が報告され、スポーツ心理学の果たすべき役割という視点から活発な討論が行われていました。また、学会企画キーノートは、『『スポーツ心理学』と『日本スポーツ心理学会』』（山本祐二先生）と「実践経験から学問に貢献する、そして再び実践へ」（武田大輔先生）の 2 演題が動画でアップされて、研究に対する真摯な姿勢が示されていました。さらに、Web 開催にもかかわらず、76 演題のポスター発表が行われ、Slack による質疑応答と意見交換が行われました。私も、初めて Slack による質疑応答というポスター発表を行いました。不慣れながらも、従来のポスター発表にない、文面での突っ込んだ議論ができたと思います。

今回、この報告の執筆を承って、私が参加した最初の学会大会を確かめたところ、1988 年（昭和 63 年）に福岡大学セミナーハウスで開催された第 15 回大会でした。33 年も前のことですが、この大会は、印象深く、大阪から大学院の先輩と共に自動車で福岡までやってきて、どのような発表があったかもおぼえているほどです。この大会から 3 回ほど参加していませんが、30 回は学会参加をしていると思います。この間、私自身が日本スポーツ心理学会およびスポーツ心理学研究にどれだけ寄与できたかという、目を覆いたくなります。山本祐二先生の学会企画キーノートを拝聴して、もっと研究して論文を書き、『『ここまではわかったかもしれないが、この先がわからない』ことを共有できる学会』およびスポーツ心理学研究に貢献できればと思う次第です。

蛇足ですが、ポストコロナでの学会は、Web などでの開催が行われるかもしれませんが、対面での意見交換や情報交換会などでの話し合いも私は大切ではないかと思っています。今回は、仙台で牛タンが食べられなくて残念でした。

特 集

九州スポーツ心理学会第 33 回大会 報告

九州スポーツ心理学会第 33 回大会が下記において開催されました。

日時:令和 2 年年 3 月 7 日(土)・8 日(日)

会場:インターネット開催 (※ ポスター発表のみ)

大会テーマ：  
『スポーツと社会』

学会企画 教育講演

テーマ: 研究的思考法 思いを伝える技術

演者: 樋口貴広 (首都大学東京)

司会: 兄井彰 (福岡教育大学) ※ Covid-19 のため中止

大会企画 シンポジウム

テーマ: 今が旬、ラグビーフットボールのススめ

「ラグビーのパフォーマンス分析からの視点-“ONE TEAM”を具体化できるか？」

演者: 戸田尊 (NTT ドコモレッドハリケーンズ、日本代表アナリスト)

「ラグビーワールドカップ出場選手の表情認知とパフォーマンスの関係」

演者: 山口幸生 (福岡大学)

「社会心理学的なラグビー選手の見方」

演者: 萩原悟一 (鹿屋体育大学)

司会: 下園博信

(福岡大学・日本ラグビーフットボール協会技術委員会・情報科学部門長)

※ Covid-19 のため中止

ポスター・フラッシュトーク

演者: ポスター発表者のうち学会初日参加者

司会: 中本浩揮 (鹿屋体育大学)

※ Covid-19 のため中止

九州スポーツ心理学会・スポーツ社会心理学研究会合同企画

ラウンドテーブルディスカッション

テーマ：2020年の先を見据えたスポーツを通じたヒトと社会の成熟

「オリンピックと LGBT」

演者：眞野豊（日本学術振興会特別研究員 PD・広島修道大学）

「東京オリンピックの功罪

演者：中村珍晴（神戸学院大学）

「自閉症児の夏季療育キャンプを通してーコミュニティ心理学の視点からー」

演者：森司朗（鹿屋体育大学）

司会：内田若希（九州大学）

※ Covid-19 のため中止

学生企画 研究室紹介

紹介大学：順天堂大学、東海大学、大阪体育大学、明星大学、広島大学

司会：杉山佳生（九州大学）

※ Covid-19 のため中止

ポスター発表（※ オンライン開催）

連 載  
こころトピック

第 7 回 『リモートマッチについて考える』

児玉 亜由実 （ 東筑紫短期大学 ）

東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定であった 2020 年。世界中がコロナウイルスの脅威にさらされ、人々の生活は一変した。

緊急事態宣言が解除され 1 か月経ったころ、プロスポーツでは、3 密を避けるために、観客を動員しない「リモートマッチ（無観客試合）」が行われるようになった。そもそも、観客は選手に対してどのような影響をもたらすのだろうか？

『人はなぜ集団になると怠けるのか「社会的手抜き」の心理学』（釘原，2013）という書籍では、応援がパフォーマンスに及ぼす影響について紹介されている。それによれば、①味方の応援がある場合とない場合、②重要な試合と重要でない試合、③有利な状況と不利な状況において、認知上の（主観的な）失点確率と実際のゲームでの失点確率を調査した結果、選手は試合の重要性に関わらず、応援があるほうが失点率は低くなると思っていた。しかし、実際のゲームでの失点確率を出した結果、重要な試合での応援の有無は失点確率にはほとんど影響しなかったが、重要でない試合では、応援があることで失点確率が高くなること示された。つまり、選手自身は応援がパフォーマンスを向上させると考えているが、実際には応援がパフォーマンスを阻害する傾向が強いことが明らかになった。

一方で、高校ハンドボール部の強豪校を対象として①無観客の前半戦と、②観客を入れて応援されている状態での後半戦で、選手のパフォーマンスに違いがあらわれるのかを検証した研究（運動通信社，2018）では、応援されることで選手の運動量が 20%アップしたという結果が得られている。

一概に、どちらが良いとは言えないが、種目特性によって観客が選手に及ぼす影響は変わってくるのがこれまでの検証で明らかになっている。私たちからすると、「リモートマッチ」は寂しく、選手のモチベーションも上がらないのではないかと感じてしまう。しかしながら、観客がいないほうが実力を発揮できると感じている選手がいる可能性もあることを忘れてはならないように思う。

参考：釘原直樹（2013）「人はなぜ集団になると怠けるのか「社会的手抜き」の心理学」中公新書

連 載

最近読んだ面白い研究または書籍を先生方にご紹介していただきます。

「みなさん！読んでみてください」

『保健体育科教員養成課程で提供されている体育心理学関連科目の特徴と課題：  
国立教員養成大学・学部での開講授業の分析結果から』

佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要 第 4 巻 2021 年（印刷中）

山津 幸司（佐賀大学）

皆さんに自信をもってお勧めできる研究ではありませんが、私が最近まとめた紀要論文をご紹介します。

まず研究の概要です。研究をはじめるきっかけを簡単に説明します。我が国の国立大学は改革や機能分化が求められ、特に教員養成大学・学部では教員養成学の拡充が強く求められています。体育学が担ってきた保健体育科教員養成への影響も小さくありません。我々スポーツ心理学会が中心に担ってきた講義「スポーツ心理学」は多くの国立大学で「体育心理学」と名称変更され、教員養成学の一翼を担うことが期待されています。私も佐賀大学の講義担当者として「体育心理学」をどう教員養成に役立たせるか悩み続けています。そこで、全国国立教員養成大学・学部における体育心理学関連科目の実態を知りたいと考え本研究をはじめることになりました。

研究対象は、中学及び高等学校の保健体育科教員免許を取得可能な国立教員養成大学・学部 54 校とし、体育心理学関連科目の 2018 年度開講状況を調査しました。54 校中 51 校、すなわち 94.4%が体育心理学関連科目を開講していました。51 校 58 科目のシラバスを検討した主な結果として、1) 科目担当者が日本スポーツ心理学会か日本体育学会体育心理学専門領域の会員であったのは 91.4% (53 科目)、2) その内訳は両学会の会員 84.9%、日本スポーツ心理学会のみ会員 15.1%であり、3) 授業内容は「スポーツの動機づけ」「運動学習」「スポーツメンタルトレーニング」が 7 割以上で扱われていたのとは対照的に、「健康スポーツの心理」「スポーツ運動の発達」は 4 割未満であった、ことなどが明らかになりました。今後の課題は、まず複数年の開講状況を分析対象とすること、また体育心理学の専門性の有無を日本スポーツ心理学会か日本体育学会体育心理学専門領域の会員かどうかで判断しましたが、体育心理に関わる学会は他にもあるため慎重に議論すべきだと思います。

最後に、私が最も知りたかった「国立教員養成大学・学部の体育心理学で教員養成学部生に教えるべき内容は何か」への明確な答えは得られていません。本研究を続け、いつか納得できる講義を提供できるようになりたいと思います。いつか本学会でも議論してみたいテーマです。企画委員の先生方、ご検討ください。同様の論文を佐賀大学教育実践研究第 37 巻 39～44 頁にも公表済みです。あわせてご拝読いただければ幸いです。

## 連載

新たなステージを求め、研究の第 1 歩を踏み出した方々をリレー形式でご紹介！

## 「研究タマゴ」

安部 七波 (福岡大学大学院)

村川 大輔 (鹿屋体育大学大学院)

八尋 風太 (九州大学大学院)

みなさん、はじめまして、九州大学大学院の八尋です。私は博士後期課程から杉山佳生先生（九州大学）の研究室に所属し、「運動部活動を担当する顧問教員のアイデンティティ」をテーマに研究しております。現在の研究に至った経緯は、鹿屋体育大学の修士課程在学時の指導教員であった萩原悟一先生（現九州産業大学）が学生競技者のアイデンティティについて研究していたこと、私自身が運動部活動の運営や顧問教員が行う指導に関心があったためです。顧問教員のアイデンティティに関する研究を進めることで、課題とされている顧問教員の労働問題、そして青少年のスポーツ界の発展において貢献できるのではないかと考えております。

私は中学時代から現在まで陸上競技を続けており、スポーツが常に自分の中心にある生活を送ってきましたが、学部は法学部であり、大学院進学前には約 1 年間金融系企業で勤務しておりました。そのような私が仕事を辞めてまで大学院進学を決意したきっかけは、勤務していた企業で行われたスポーツ大会でした。スポーツ大会の最後に行われたリレーで、私がアンカーを務め逆転優勝をした際、普段厳しい上司が笑顔で喜び、盛り上がっている姿を見てスポーツが持つ力の素晴らしさを、身をもって体験しました。そのような体験を一人でも多くの人にしてもらいたいという思いからまずは自分がスポーツのことをもっと知るために大学院進学を決意しました。（もちろん好きなことを研究して生きていきたいという思いもありました。）研究内容は運動部活動についてですが、私が体験したようなことをいろいろな方に体験してもらうために修士在学時には地域の活性化に繋がるスポーツイベントの企画・運営などに従事しました。

2020 年度はコロナ禍により、思うように研究が進まなかったり、学会等で先生方に会うことができず貴重なお話が聞けなかったりと想像とは違う博士課程生活を送っておりますが、現在の状況が落ち着いた際に、先生方や院生のみなさんにお会いできることを楽しみにしております。研究者としてまだまだ未熟でありますので、今後とも何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

\*各執筆者の所属は、執筆当時のものです。ご了承ください。

大石彩加 (九州大学大学院)

相羽 枝莉子 (九州大学大学院)

古門 良亮 (九州工業大学大学院)

守田 有希 (福岡大学大学院)

佐々間智央 (九州工業大学大学院)

---

## 学会からのお知らせ

---

《 九州スポーツ心理学会の紹介 》

### 沿 革

本学会は、第 1 回が昭和 63 年 3 月に開催され、九州スポーツ心理学研究会として発足しました。第 6 回大会（平成 5 年）より九州スポーツ心理学会と改称し、学会としての組織化が行われています。

### 目 的

本学会は、運動・スポーツ心理学における研究と介入を促進することを目的としています。事業として、運動・スポーツに関する心理学的研究とその応用に関心ある人々のために年 1 回の学会大会を開催し、情報交換および交流の場を提供しています。

### 会員のメリット

1. 健康・スポーツ心理学に関するさまざまな情報が得られます。
2. 年 1 回の学会大会の案内が送付されます。
3. 「九州スポーツ心理学研究」が送付されます。
4. 健康運動指導士の公衆ポイントが得られます。
5. 日本スポーツ心理学会「資格認定スポーツメンタルトレーニング指導士」の研修ポイントが得られます。

《 学会入会希望の方へ 》

入会をご希望の方は下記の項目を記入の上、事務局まで郵送または E-mail にてご連絡ください。

1. 氏 名
2. 所属機関
3. 連絡先（勤務先・自宅）
4. 電話番号（勤務先・自宅）
5. FAX 番号（勤務先・自宅）
6. E-mail

連絡先 〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1 番地

鹿屋体育大学 体育学部 体育・スポーツ心理学研究室

九州スポーツ心理学会事務局 宛

E-mail : nakamoto@nifs-k.ac.jp （中本浩輝）

ikudome@nifs-k.ac.jp （幾留沙智）

# 九州スポーツ心理学会 第 34 回大会開催!

## 大会テーマ「多様性」

令和 3 年 3 月 6 日～14 日 インターネット開催

【日時】 令和 3 年 3 月 6 日 (土) ～ 令和 3 年 3 月 14 日 (日)

【参加費】 会員¥3,000 当日会員及び学生会員¥2,000

### 【3 月 6 日 (土)】

11 : 30～12 : 30 理事会 (理事・役員のみ)

13 : 00～13 : 10 会長挨拶 森司朗 (鹿屋体育大学)

13 : 10～14 : 40 ラウンドテーブルディスカッション

テーマ : メンタルトレーニングの実践を研究論文にするために  
～実践を促す研究論文の在り方を考える～

パネリスト : 兄井彰 (福岡教育大学)

伊藤友記 (九州共立大学)

金高宏文 (鹿屋体育大学)

司会 : 中本浩揮 (鹿屋体育大学)

14 : 50～15 : 10 総会

### 【3 月 6 日 (土) ～3 月 14 日 (日)】

以下のオンデマンド講演及びポスター発表は期間中にいつでも視聴可能です

※オンデマンド講演の公開は 3 月 7 日 (日) から行います

特別講演 幼児の心と体の育ち

演者 : 森司朗 (鹿屋体育大学)

特別講演 研究的思考法 想いを伝える技術

演者 : 樋口貴広 (東京都立大学)

特別講演 スポーツとセクシャリティ

演者 : 眞野豊 (日本学術振興会特別研究員 PD・広島修道大学)

## 九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ

(平成 30 年 4 月～令和 3 年 3 月)

会長	森 司朗	鹿屋体育大学
副会長	兄井 彰	福岡教育大学
理事長	中本 浩揮	鹿屋体育大学
顧問 (前会長) :	徳永 幹雄	九州大学名誉教授
	佐久本 稔	福岡女子大学名誉教授
	山本 勝昭	福岡大学名誉教授
	橋本 公雄	熊本学園大学
理事 :	磯貝 浩久	九州産業大学
	杉山 佳生	九州大学
	伊藤 友記	九州共立大学
	荒井 久仁子	熊本健康・体力づくりセンター
	正野 知基	九州保健福祉大学
	山内 正毅	長崎大学
	和多野 大	沖縄工業高等専門学校
	甲木 秀典	西九州大学
	手島 史子	山口短期大学
	下園 博信	福岡大学
	内田 若希	九州大学
	萩原 悟一	鹿屋体育大学
広報担当理事	水崎 佑毅	徳山大学
会計担当理事	幾留 沙智	鹿屋体育大学
監事	堀田 亮	近畿大学九州短期大学
	安部 七海	福岡大学
事務局スタッフ		
総括	中本 浩揮	鹿屋体育大学
会計	幾留 沙智	鹿屋体育大学
編集	萩原 悟一	鹿屋体育大学
各種委員会委員		
企画委員会	森司朗 磯貝浩久 兄井彰 杉山佳生 伊藤友記 中本浩樹 内田若希	
広報委員会	下園博信 山崎将征 水崎佑毅	
HP 担当	福岡大学	

## 編集後記

まずは、ニュースレターの発刊が大変遅くなり申し訳ありません。私の怠慢によって 2 号同時発刊となってしまいました。今回の発刊に当たって、皆様にご迷惑をおかけしました。にもかかわらず、私の依頼を快く引き受けてくださった先生方や大学院生の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。有難うございました。

このような事情のため、編集後記も 2 号同時に書いているということを正直にお伝えしたところで、編集後記を始めさせていただきます。

2020 年は大変な年となりました。Covid-19（コロナ）のため、人の生き方に大きな変化が生じ、それに伴いネガティブなニュースが日々報道され続けています。九州スポーツ心理学会（第 33 回大会）も、多くの企画を中止にせざる負えないという状況でありました。一方で、オンラインによるやり取りが主流となりはじめ、新しい働き方も生まれました。また、働き方だけではなく、食事の仕方においてもデリバリー型の食事やオンライン飲み会など、新たな食事の形も生まれました。私自身、何度かオンライン飲み会を実施し、数年ぶりに友人と再会することができました。ニュースはどうしてもネガティブな報道が多くなってしまいますが、新しい価値観も生まれてきていることにも目を向け、コロナと共に生きる（With コロナ）の考え方も必要なのかなど、個人的に思っているところであります。

さて、第 34 回大会がインターネットで開催されました。インターネットによる開催ではありませんでしたが、全ての企画に工夫がなされており、特にポスター発表では、Slack というツールを使った文面による質疑応答が行われ、それによって他の先生方の質疑応答の内容も確認できるので、通常のポスター発表よりも多くの情報を知ることができました。学会開催に当たり、ご尽力いただきました鹿屋体育大学の先生方、大学院生の皆様、本当に有難うございました。

最後になりますが、引き続き手洗いうがい等の予防を続け、コロナに負けない強い気持ち（メンタル）を持って、コロナと共に過ごしていきたいと思います。

編集担当 水崎佑毅